

旅随想録
平成二十年九月十五日
戸隠神社の靈氣 たなか踏基

高校同窓で拙著の讀者、ハンドル名孤狼凜さんから戸隠古道のウォーキングに誘われたのは、六月頃だったと記憶する。一昨年の木曾旅に続き今回もオフ会仲間を紹介され、取材兼ねて同道の旅をした。

九月十一日、あさま五一五号に大宮から乗車し正午長野駅で下車。車中顔馴染みは、如風・鹿島山さんの両氏。メールで連絡を取り2号車の自由席に乗り込む。東京から乗車一行が踏の席を確保してくれていた。一行で初対面は小田原の熟女二人(そらさんと川蝉さん)と富士宮の男性一名(山女さん)の計六名。膝を交えて歓談した一時間弱の車内だった。

長野駅で二回の下見をして計画に備えた信州在住の散輪坊さんと孤狼凜さんと合流。二人とは日本一の千曲市杏の里で既に顔馴染み。だがネットで見知りの彼等は、本名知っていてもハンドル名にさんをつけ、互いに親しげに呼びあつのは一昨年の木曾旅と同様だった。踏はネットのオフ会は昔から好きではない。ヴァ・チャル世界を現実延長し、知友・親友の如く軽口を叩き冗談を言い合う心境にはなれないからだ。今回は、前回ほどには奇異に感じられないものの、慣れるに至らずの心境である。

なれば誘われた踏はオフ会に何故参加したのか。出版目処がたつと何時も踏は虚脱感に襲われる。時代物四百三十枚の次作では、全精力を傾注したのでそれが特に酷い。初校ゲラは時代考証に優れた校閲者の助言に従い、悪戦苦闘しながら赤入れの直し作業が終る。鬱状態・脱け殻状態になっている身体を思い切り苛めて、何かエネルギーを心内に注入したい心境だった。大学同窓会有志のウォーキングの誘いをキャンセルし、敢て北信濃の呼称

戸隠古道の靈氣を吸い心を甦らせたかった。昔の戸隠神社参詣路は善光寺から30km余だった由。十二時半の川中島バスに乗車して飯綱高原下車。

大座法師池を背に碑前で全員で記念撮影する。今回飯綱登山口より山行開始したので正味20km余りか。善光寺と戸隠神社の中間点に一の鳥居跡、109m毎に丁石が立つ古道が始まる。目指すは今夜宿、戸隠宝光社の宿坊・法林坊小谷である。

水芭蕉の時期に観光客で賑う森林植物園木道に入ると、如風さんと散輪坊さんの野草談義に一行の歩が止る。辺り冷気にも関わらず汗ばむ肌。県道脇の草地を丁石に沿って歩く。散輪坊さんが木枝に足を取られ仰向けこけたが、愛用カメラは死守し落さず無事。休憩時孤狼凜さんの心遣いの林檎と胡瓜を賞味。被沢にて眺めた果てしなく続く蕎麦の白い花々。秋風に揺れ夕陽境界で群舞する様は流石の一言。格好スポーツと見え多くの写真愛好家が撮影中。山女さんサングラスを失くす。

予定より早めの四時半頃戸隠宝光社到着。宿小谷に入り男五人、女三人夫々部屋で暫し談笑。男性合い部屋の面々は、二十キ減量の鹿島山、駄洒落の版画家で花博士の如風、野草野鳥を愛する散輪坊、最新薪ストーブに凝る山女と踏基の五人であった。

一風呂浴びて夕餉の膳を皆で囲む。ビールで一同乾杯。地元旬の食材料理の饗応。特に150年前の八月二十三日のハレの日に奥社で振舞われたという「戸隠古流祭礼御膳」を楽しみ携帯撮影。

特に、所望されたとかで散輪坊さんは男の手料理を披露。川蝉さんの上品な笑顔。鹿島山さんは酒豪振りは衰え知らず冷酒を一人手酌で、誕生日祝いを自ら吹聴しながらコップ酒を痛飲する。踏も負けずにコップ酒で対抗するも勝負にならず。ビール党の如風さんは酔いに任せ、三秒間に即席の駄

洒落を飛ばし孤狼凜さんにニジリ寄り他二人の熟女連の傍からも離れたがらず。前木曾旅の話題で弾み、皆笑い転げて時間を持って余すという事がない。最後に蕎麦がでて九時半お開き部屋に退く。

翌朝六時宿の車で鏡池へ。気温十二度、漣一つない水面に映す山影のコントラスト一瞬の光景。一人半袖鹿島山さんが寒そうで踏のヤツケを貸す。絶好の写真スポット。湖畔に一人佇む鹿島山さん。車の運転手が再度蕎麦の花畑に案内。早朝と昨夕ではその光影の差が顕著で得した気分宿に戻る。

七時半朝食を済ませ、八時四十五分宿出発。宝光社の石段を息切らして登り神道。森の間道を抜けて中社に向う。天岩窟に籠った天照大神を神楽で誘い出した知恵の神を祀る由。全員記念撮影。女人堂跡、比丘尼石、稚児の塔を経て奥社の茶屋。各自ソフトクリーム舐める。木曾路の顛末を再ネタにしながらか。唯一舐めるを嫌い?持参スプーンですくって賞味上品な?孤狼凜さん。全員荷物を店に預け空身で参道口へ。下馬石柱と1.9kmの道標。赤塗りの随神門、樹齡四百年杉並木巨木、そらさん山女さんが遅れるも民生委員川蝉さん健脚。最難関の胸突き八丁崩れ石段を這うようにして登り奥社到着。水を司る九頭龍神を祀る木造の九頭龍社。コンクリート造奥社には、天の岩戸を開け戸隠に投げ捨てた天手力雄命を祀る。

戸隠の祀神靈に各自お賽銭を上げて何を祈るか。踏は家では見せない表情を晒し、宴席では年齢を忘れて酔ってハシヤギ、戸隠神社の靈氣に触れて果して甦れたかと自問しながら、長野駅頭で幹事役の散輪坊・孤狼凜さんに礼を述べて新幹線乗車。今回一泊二日の愉快なエピソードを見聞した戸隠山行の思い出を終生忘れないであろう。彼等に親近感を覚えた戸隠の秋の小旅ではあった。了